

## たんにしょう 『歎異抄』のおはなし③

前回は『歎異抄』第一条を拝読いたしましたが、浄土真宗の教えの要<sup>かなめ</sup>をコンパクトに言い表した言葉、すなわち「阿弥陀仏<sup>あみだぶつ</sup>の誓願<sup>せいがん</sup>に救われて極楽浄土<sup>ごくらくじょうど</sup>に往生<sup>おうじょう</sup>できると信じて念仏<sup>ねんぶつ</sup>を称えようという心が起ったそのときに、もうすでに阿弥陀如来<sup>あみだによらい</sup>に救われている」ということを中心にお話ししました。

今日お読みする第二条はちょっと長いので、今回と次回・報恩講の時の二回に分けて、じっくり拝読したいと思います。

第二条は第一条とは違って、具体的な状況が推察される、臨場感のあるドラマ仕立てといってもいいような文章になっています。

第二条の背景として考えられることが二、三点あります。

親鸞<sup>しんらん</sup>聖人<sup>しょうにん</sup>は九歳<sup>ひえいざん</sup>で比叡山<sup>のぼ</sup>に上られ、二十年間、天台宗<sup>てんだいしゅう</sup>の修行と学問<sup>はげ</sup>に励まれますが、法然<sup>ほうねん</sup>上人<sup>しょうにん</sup>と出会って念仏<sup>ねんぶつ</sup>の教えに入られます。しかし念仏弾圧<sup>ねんぶつだんあつ</sup>のため、法然上人<sup>しんらんしょうにん</sup>は四国<sup>えち</sup>へ、親鸞聖人<sup>しんらんしょうにん</sup>は越後<sup>えちご</sup>へ流罪<sup>るざい</sup>になります。流罪赦免<sup>るざいしゃめん</sup>の後、親鸞聖人<sup>しんらんしょうにん</sup>は京都には戻られず、関東に向かわれました。そして六十歳前後の晩年、二十年過ぎされた関東の茨城を後にして、生まれ故郷の京都に戻られます。京都で三十年くらい過ごされますが、聖人は、天台宗のお坊さんであった弟さんの寺に住んで、著述に没頭されます。ところが関東に残されたお弟子さんたちは、師匠<sup>ししょう</sup>を失って心の拠り所<sup>よどころ</sup>がなくなって、動揺<sup>どうよう</sup>するわけです。そこで関東のお弟子さんたちの何人かは、信仰上の不明な点を問いただそうと、京都の親鸞聖人を遠路はるばるお訪ねします。おそらく『歎異抄』作者の唯円<sup>ゆいえん</sup>も、その一行の一人として親鸞聖人にお会いになったのでしょう。第二条の背景には、まずそのようなことがあったのです。

もうひとつの大きな背景として、親鸞聖人の長男である善鸞<sup>ぜんらん</sup>が起こした、いわゆる「善鸞事件」があります。善鸞<sup>ぜんらん</sup>が親鸞聖人の名代<sup>みょうだい</sup>（代理）として関東へ行き、自分は夜中に父親からそっと秘密の教えを聞いたとか、弥陀の十八願は“しぼんだ花”だなどと誤った教えを説いたものですから、人々の信心を動揺<sup>どうよう</sup>させたのです。東国の門弟<sup>とうごくもんてい</sup>たちが大勢で親鸞聖人に会うためにはるばる京都を訪れたのは、よほどの大事件があったからだろうと思われまます。彼らは善鸞<sup>ぜんらん</sup>の説く教えに惑<sup>まど</sup>わされて

疑問をもち、その疑問を晴らすために、困難を乗り越えて、はるばる上京したのではないかというわけです。親鸞聖人はこの結果、1256年、八十四歳の時に息子の善鸞を義絶します。

このほかに念仏者が鎌倉幕府に訴えられた裁判があり、学者により諸説あるようですが、門弟の性信房が力を尽くして裁判を解決したとされるお手紙が残っています。

こうした事件が、第二条の背後にあったのではとされています。

それでは早速、本文を読んでみたいと思います。

「おのおの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。」

「おのおの」とは、あなた方、皆さん、という意味で、信仰上の問題について京都の親鸞聖人を訪ねた関東の門弟たちのことです。

「十余ヶ国」ですが、これは東海道を通ったとすると、常陸の国（茨城）から下総（茨城南西部、埼玉東部、千葉北部、東京の一部）、武蔵（埼玉、東京、神奈川の一部）、相模（神奈川）、伊豆（静岡東部、伊豆半島）、駿河（静岡北東部、中部）、遠江（静岡西部）、三河（愛知東部）、尾張（愛知西部）、伊勢（三重北中部、愛知の一部、岐阜の一部）、近江（滋賀）、山城（京都南部）という十二か国のことです。東山道を通った場合は常陸・武蔵・甲斐・信濃・美濃・近江・山城の七か国なので、こちらはおそらく違うと思われます。

この十二か国の国境を超えて、極樂往生のみちを問いただしたいという思いから、関東の門弟たちは、はるばる京都の親鸞聖人を訪ねます。

「身命をかへりみず」というのは、命がけで、生命の危険をかへりみることなく、という意味です。

現代語訳は以下ようになります。

〈あなた方が、東国からはるばる十余りもの国境を越えて、命がけで京都のわたしを訪ねてこられた目的は、ただひとへに極樂浄土に往生する道に問いただしたいという思いからでしょう。〉

関東の門弟たちは、「念仏さえ称えていれば救われるというのでは頼りなくてしょうがない。念仏以外の、念仏を支えている背景、念仏以外の往生極樂の道について詳しく教えてください」というような疑問をもって、親鸞聖人に尋ねるわけです。この「ひとへに往生極樂の道をとひきかん」というのが、門弟たちの旅の目的です。

「しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころろにく

くおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺<sup>なんとほくれい</sup>にも、ゆゆしき<sup>がくしょう</sup>学生たち、おほく<sup>おわ</sup>座せられてさふらふなれば、かのひとびとにもあひたてまつりて、往生<sup>おうじょう</sup>の要<sup>よう</sup>よくよくきかるべきなり。」

「法文<sup>ほうもん</sup>」とは、仏の教えを書き記した文章で、<sup>きょうてん</sup>経典やその<sup>ちゅうしゃくしょ</sup>注釈書を指します。

「こころにくくおぼしめして」とは、いぶかしく思われて、ということです。

「南都北嶺<sup>なんとほくれい</sup>」とは、奈良の<sup>こうふくじ</sup>興福寺と<sup>ひえいざんえんりやくじ</sup>比叡山延暦寺のことです。

「ゆゆしき」とは、この場合、素晴らしい、立派な、大変すぐれたという意味です。

「学生<sup>がくしょう</sup>」は、<sup>がくもんそう</sup>学問僧のことです。<sup>きょうてん</sup>経典や<sup>ろんしゃく</sup>論釈を学ぶ<sup>しゅっけそう</sup>出家僧です。

仏教の漢字の読み方には「呉音」と「漢音」とがあり、仏教語の多くは中国の南朝<sup>なんちょう</sup>時代にあった呉<sup>ご</sup>という国の読み方に従いますので、現代の漢字の読み方とは少し異なります。

『仏説阿弥陀<sup>ぶつせつあみだきょう</sup>経』をお称えする時にも、普通は呉音でお読みしますが、法要によっては漢音でお称えすることもあります。

またこの<sup>がくしょう</sup>学生の他に<sup>りえき</sup>利益と書いて<sup>りやく</sup>読んだり、<sup>ぶんしょ</sup>文書と書いて<sup>もんじょ</sup>文書と読みますし、<sup>せんたく</sup>選択と書いて<sup>せんじやく</sup>選択(法然上人<sup>ほうねんしょうにん</sup>が書かれた『<sup>せんじやくほんがねんぶつしゅう</sup>選択本願念仏集』、浄土宗では『<sup>せんちやくほんがねんぶつしゅう</sup>選択本願念仏集』と読む)、<sup>しぜん</sup>自然と書いて<sup>じねん</sup>自然と読みます。親鸞<sup>しねん</sup>聖人の教えのひとつに「<sup>しねんほうに</sup>自然法爾」といって、「おのずからしからしむ」というものがありますが、またいずれお話しする機会があると思います。

6世紀頃に日本に漢字が伝わったのは朝鮮<sup>ちょうせん</sup>の百濟<sup>くだら</sup>からですが、当時の百濟<sup>くだら</sup>では中国の南朝<sup>なんちょう</sup>・呉<sup>ご</sup>と交流があり、漢訳の<sup>かんやく</sup>経典も百濟<sup>きょうてん</sup>經由<sup>くだらけいゆ</sup>で呉音<sup>ごおん</sup>によって読まれていたそうです。

現代語訳は次のようになります。

くしかし、わたしが<sup>ねんぶつ</sup>念仏の他に<sup>ほか</sup>浄土<sup>じょうど</sup>に<sup>おうじょう</sup>往生する道<sup>みち</sup>を知っているとか、またその<sup>おし</sup>教えが<sup>と</sup>説かれた<sup>きょうてん</sup>経典などを<sup>し</sup>知っているだろうと思われているのなら、それは<sup>たいへん</sup>大変な<sup>あやま</sup>誤りです。そういうことであれば、奈良の<sup>な</sup>興福寺<sup>こうふくじ</sup>や<sup>ひえいざん</sup>比叡山<sup>えんりやくじ</sup>の<sup>がくそう</sup>延暦寺<sup>えんりやくじ</sup>などにも<sup>おおぜい</sup>すぐれた<sup>ひと</sup>学僧<sup>がくそう</sup>たちが<sup>おおぜい</sup>大勢<sup>ひと</sup>おいでになりますから、その人たちに<sup>あ</sup>お会いになって、<sup>じょうどおうじょう</sup>浄土往生<sup>ひつよう</sup>のために<sup>くわ</sup>必要な<sup>たす</sup>ことを詳しくお尋ねになるとよいでしょう。)

念仏以外の往生極楽の道について教えてほしいという問いに対する親鸞聖人のお答えは、「念仏の他に往生の道や法文などを知っていると考えるのは誤りです」という、実につれないものでした。関東から京都まで親鸞聖人を訪ねたお弟子さんたちは、この言葉を聞いて、さぞかしがっかりされたことでしょう。

もし念仏以外に往生の道を知っているのなら、遠慮なく奈良や比叡山に行って偉い学僧に聞きなさいと、聖人は突き放したように、さらに言われます。奈良や比叡山というのは、自ら厳しい修行をして悟りを開こうとする自力の教えの仏教を指します。

「親鸞しんらんにおきては、ただ念仏ねんぶつして弥陀みだにたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信しんずるほかに別べつの子細しさいなきなり。」

この部分だけ少し太字にしましたが、これは第二条の中でもよく知られた有名な言葉だからです。「ただ念仏して」とは、専もつぱら念仏ねんぶつだけを称となえて、ということです。この「ただ」は、「信ずる」にかかる言葉だと解釈する学者もおられます。

「よきひと」とは法然上人ほうねんしょうにんのことを指します。善知識ぜんちしき（すぐれたよき友、人を信心に導く徳のある賢者）のことで、深い敬慕の念を込めた言葉です。

「かぶりて」は、いただく、受けるという意味です。

「別の子細」とは、特別な理由や事情ということです。

現代語訳は以下の通りです。

「親鸞しんらんにおいては、「ただ念仏ねんぶつして、阿彌陀仏あみだぶつに救すくわれて往生おうじょうさせていただくのです」という法然上人ほうねんしょうにんのお言葉をいただいて、それを信しんじているだけで、他ほかに何か特別とくべつな理由りゆうがあるわけではありません。」

この親鸞聖人の確信に満ちたお言葉を聞いて、不安に思っていたお弟子さんたちの心もおのずと静まって、少しは落ち着いたのではないかと思います。

「親鸞におきては」という言葉に、親鸞聖人の信心の、自分自身の心の落ち着きどころがよく示されているように思われます。他の人はどうであっても自分には関係なく、「親鸞におきては」なのです。

「念仏ねんぶつは、まことに浄土じょうどにむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄じごくにおつべき業ごうにてやはんべるらん、総そうじてもて存知ぞんちせざるなり。」

「まことに」は、本当に、という意味です。

「地獄」とは、欲望よくぼうにまみれ、罪悪ざいあくを犯おかした者が、その報むくいとして生まれる世界のことです。

「総じて」は、浄土じょうどの因いんや地獄じごくの業ごう両方ともに、という意味です。

「存知」は、知っている、心得こころえている、わきまえ知るとのことです。

現代語訳は以下の通りです。

「念仏ねんぶつは本当に浄土じょうどに生まれる因いんなのか、逆に地獄じごくに墮おちる行おこないなのか、わたしには全まったくわかり

ません。〉

「地獄」という言葉が『歎異抄』には何度か出てまいります、この背景には、浄土宗を敵視していた日蓮上人の存在があったと思われます。

日蓮上人はこの当時、千葉で立教開宗して、親鸞聖人が亡くなるおよそ十年前に『立正安国論』を書いて、当時の最高権力者であった北条時頼に提出します。そして日蓮宗の布教活動を盛んに行なっていました。

日蓮上人は「念仏無間」と言われて、念仏を称えると無間地獄に堕ちるぞと警告されました。無間地獄は阿鼻地獄ともいいます。

これは「四箇格言」といい、日蓮上人は「真言亡国、禅天魔、念仏無間、律国賊」という四つの格言を掲げて、他宗を厳しく批判されました。

しかしこの「念仏無間」という場合には、法然上人の教えを指すようです。

そして親鸞聖人の教えを聞いた門弟の人々が、茨城の隣である千葉で念仏批判を繰り返す日蓮上人の教えを知らなかったはずはないと思われます。

本来は法然上人の説かれた念仏に対する批判だったのですが、親鸞聖人のお弟子さんたちも、やはり自分たちに対する念仏批判だと受け取られていたのではないのでしょうか。

ですから親鸞聖人のお言葉に、たびたび地獄という言葉が使われているのは、このようなことが反映されているのかもしれませんが。

こうした点からも、日蓮上人に批判され動揺して不安に思っただけのお弟子さんたちが京都まで親鸞聖人をはるばる訪ねたのではないかと思われ、これもまた『歎異抄』が書かれた背景のひとつではないかと思われまます。

念仏は浄土に生まれる因なのか地獄に堕ちる行いなのか、「わからない」と答える聖人の言葉は一見、門弟たちを突き放したような、冷たいような、そっけない印象を受けます。しかしここには、本当にものを知る人の、開き直った落ち着きを感じられます。

信心というのは知識では決してなく、実際の在り方です。地獄があるとかないとか、浄土があるとかないとかというのは知識の問題で、本当に浄土を実感しない人は、たとえあるといわれても本当に落ち着くかということ、実は落ち着けないのです。

今日は第二条の前半をお読みしました。次回はこの続きの後半を拝読したいと思います。

「念仏を称えると浄土に生まれるのか地獄に堕ちるのかわからないけれども、たとえ法然上人にだまされて地獄に堕ちたとしても私は後悔しません。地獄は私の定められた住み家なのです」と親鸞聖人は第二条の後半で続けて言われます。それでは次回をお楽しみに。ありがとうございました。